

『慶應マーケティング論究』
第5巻 (Spring, 2009)

巻頭言

慶應義塾大学 商学部 小野晃典研究会
第5期ゼミ長 森本孝平

小野晃典研究会に入会して、気づけば2年の歳月が過ぎ、卒業を目前に控えている。思えばこの2年間は、入会前とは比べものにならないほど濃密な時間であった。ゼミを自分たちがより大きく成長できる場にするべく、仲間と熱く議論を交わし、試行錯誤を繰り返した日々。この怒涛のように過ぎ去った日々から、我々は何を得たのであろうか。また、ゼミに何を残すことができたのであろうか。

我々は5期生であるとともに、再開ゼミの1期生として、小野晃典研究会に入会した。ゼミを再開することには、2つの意味があった。それは、これまで先輩方が遺したものを掘り起こすことと、そして、それに自分たちがさらに積み上げることである。特に、入会当初はゼミというものを経験したことがなかったため、研究会のWEBサイトに残されている情報を頼りに、ゼミ生活をスタートさせた。そして、先輩方と同じことをやっていく中で、同期と議論を重ね、ゼミが自分たちにとってより大きく成長できる環境であるように、改善を行っていった。その結果、ゼミの活動内容は、先輩方がなさってきたことのコピーではなく、5期生が創ったというに相応しい内容となった。

夏休みが明けて、我々は過去最多の4つの共同研究プロジェクト（マーケティングゼミ合同研究報告会、異分野インゼミ研究報告会、関東10ゼミ討論会、学生広告論文電通賞投稿論文）という大いなる目標に取り組んだ。その目標を達成するまでの道のりは苦難の連続であった。テーマを決める際には、思いつくテーマを片端から100以上あげてはいったものの、出では棄却され、出では棄却されることの連続であった。そして、ようやく研究テーマは決まったものの、研究アプローチが一向に定まらず、ひたすら議論を重ねる日々。既存研究を読み漁り、自分たちの仮説を練り直してはまた議論を重ねるという日々であった。さらに、論文を執筆するという最後の段階においても、我々の日本語の能力に問題があったため、なかなか完成に至らなかった。しかし、我々はこのような苦難に対して、研究プロジェクトごとにチームワークを発揮し、一切の妥協をせず、膨大な時間をかけて論文に取り組んだ。そして、どの研究プロジェクトの論文も「マーケティングの新潮流」という題に相応しい論文を完成させるに至ったのである。

また、小野晃典研究会のもはや伝統と呼ぶに相応しい慶應義塾商学会賞への投稿も忘れてはならない。3年生にして投稿を決意した異分野インゼミ研究報告会チームは、他チームよりも人数が少ないという逆境に立ち向かいながら、見事に受賞を果たした。そして、細川、高崎の両名に至っては、4年次に卒業論文を投稿し、2年連続受賞という小野晃典研究会始まって以来の快挙を成し遂げてくれた。さらに、田中が

テレコム電気通信普及財団賞 テレコム社会科学学生賞受賞を果たした。また、課外活動においても5期生の活躍は目覚ましいものがあった。特に、3年次秋のソフトボール大会では、4位入賞、4年次の春には何と優勝を果たしたのである。この2年間、同期の間では明るい話題が絶えなかった。

「自らの力で課題を発見し解く姿勢」

これこそ、5期生が2年間のゼミ生活で得た最大の財産であろう。我々5期生は、再開ゼミ1期生ということもあり、自らの力で問題を解決せねばならない機会が多く、そのおかげで自分で考え解決策を模索することを自然と行うようになった。『慶應マーケティング論究・第5巻』は、こうした5期生の活動の集大成が刻み込まれている。それ故、我々の卒業論文集に、学生の視点を記述しただけの論文は、この論文集には存在しない。5期生各々が、既存研究を紐とぎ、それらの問題点を指摘して、新たな仮説を構築する創造的な論文ばかりである。

5期生は、この卒業論文集の発刊をもってゼミ生活の終焉を迎え、それぞれの道へと足を踏み出すこととなる。先の見通しが立たない現代社会においては、どんな苦難が待ち受けているか、全く予測できない。このような環境においては、確固たる自分というものを持っていなければ、苦難に立ち向かうことはできないであろう。しかし、5期生は、その厳しい社会に立ち向かうための基盤を、小野晃典研究会において築いてきた。今後も、自分というものをしっかりと持ちながら、何事にも臆することなく挑戦していきたい。そして、いつの日かそれぞれの道で活躍する5期生とともに、語り合える日が来ることを心待ちにしている。

末筆ながら、我々の良き指導者であり、理解者である小野晃典先生に心から深く感謝の意を述べたい。論文執筆に際しては、細かくご指導いただき、いつ何時でも嫌な顔1つせず、親身になって相談にのって下さるなど、本当にお世話になった。また、先輩が行ってきた活動を変更したり、新たな活動を提案したりしたときにも真摯に受け止めて下さり、我々の考えが誤っているときには優しくご指摘下さった。我々が2年間、研究会で多くの挑戦をし、学ぶことができたのは、先生の丁寧なご指導と包容力があればこそである。今後とも、先生のご厚意に感謝し、それに報いるよう精進していきたい。

2009年3月吉日